

オーケストラ

柴辻純子

コロナ禍も落ち着き、オーケストラ団体の活動も活発になってきた。その一方で世界に目を向ければ、ロシアのウクライナ侵攻ははまだ終結に至らず、世界情勢の不安定化や記録的な円安など、オーケストラの運営に影響を与える要素も少なくない。そうしたなか、NHK交響楽団（5月）と、東京フィルハーモニー交響楽団（10～11月）が欧州ツアーを行った。N響は首席指揮者ファビオ・ルイーゾと5か国6都市を巡り、アムステルダムではベルリン・フィルやロイヤル・コンセルトヘボウ管などととも、「マーラー・フェスティバル2025」に参加、交響曲第3番と第4番を演奏した。東京フィルは、名誉音楽監督チョン・ミョンフンと7か国8都市で公演を行い、トゥールーズではアル・オ・グラン劇場の「偉大なる演奏家シリーズ」40周年記念のオープニングとして招かれた。両楽団とも欧州各都市で音楽的な成果を上げたが、一方で日本の楽団の認知度はいまだ十分とは言いがたい。国際的な存在感を高めるためにも、日本のオーケストラ界全体の発展においても、日本の楽団の継続的な海外公演は必要であると感じた。

さて、国内主要楽団の活動について、N響は、ヘルベルト・ブロムシュテットが10月定期に登場、3プロ6公演を指揮した。ストラヴィンスキー「詩篇交響曲」とメンデルスゾーンの交響曲第2番「讃歌」のAプロは、スウェーデン合唱団の清らかな合唱とともに神に捧げられた祈りの崇高さは感動的だった。また、8年ぶりにシャルル・デュトワが定期を指揮。ラヴェルやメシアン作品での緻密に作られた繊細な響きと色彩感が絶妙だった（11月）。そのほか、トゥガン・ソフィエフ渾身のショスタコーヴィチ交響曲第7番（1月）、フィンランドの25歳、タルモ・ペルトコスキは、新鮮な驚きもたらした（6月）。

読売日本交響楽団は2月、常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレが、2025年が記念年のアルバン・ベルクの歌劇『ヴォツェック』を演奏会形式で取り上げた。オペラ指揮者として欧州で評価の高いヴァイグレは、整然かつ複雑に作られたベルクの音楽を解像度の高い演奏で聴かせた。首席客演指揮者ユライ・ヴァルチュハ（8月）、初共演のケント・ナガノ（9月）との独自のアプローチによるマーラーの交響曲第7番「夜の歌」をはじめ、多彩な指揮者陣と高水準の演奏で話題を集めた。東京都交響楽団も、音楽監督の大野和士と、大野がオペラ芸術監督を務める新国立劇場のオペラ

ピットに入って『ヴォツェック』を演奏。リチャード・ジョーンズの演出と相まって色彩感のある音楽を作り上げた（11月）。また、年末にはフィンランドの中堅ペッカ・クーシストが2026年4月からアーティスト・イン・レジデンス、28年から首席指揮者就任予定と発表され、新たな時代を次世代に託す楽団の決断は注目された。

楽団シェフの交代と言えば、2014年から務めた東京交響楽団音楽監督ジョナサン・ノットが最終年を迎えた。ノットは、20世紀や同時代の音楽を巧みに組み合わせた魅力的なプログラミングで多彩な活動を展開し、コロナ禍での対応など楽団と特別な関係を築いた。とりわけ7月のブリテン「戦争レクイエム」の緊迫感と透明感、その歌詞は戦争が現実となったいま、より痛切に感じられた。最後の定期は、就任披露演奏会と同じ武満徹「セレモニアル」とマーラーの交響曲第9番で締め括った（11月）。

欧州ツアーを成功させた東京フィルは、チョン・ミョンフン、ミハイル・プレトニョフ、アンドレア・パッティストーニがそれぞれ個性を打ち出したプログラムで魅了した。どの演奏でも弦楽器のアンサンブルの精度が高く、管楽器の充実も特筆される。日本フィルハーモニー交響楽団は、2023年から首席指揮者を務めるカーチュン・ウォンと関係を深める。没後50年のショスタコーヴィチの交響曲第11番では大編成のオーケストラを手堅くまとめ、意欲と情熱に溢れる演奏で聴衆に訴えた（10月）。また、長年継続する九州公演は、芸術性と社会性の両輪での活動への評価から佐川吉男音楽奨励賞受賞した。

新日本フィルハーモニー交響楽団の佐渡裕音楽監督は、「ウィーン・ライン」としてウィーンにゆかりの作曲家を軸に選曲する。1月のマーラーの交響曲第9番の豊かな情感と引き締まった躍動は、3シーズン目となる指揮者と楽団の充実した関係を示していた。5月に登場の86歳ハインツ・ホリガーの鋭敏な感覚は、指揮とオーボエの両方で発揮され、卓越したテクニックと見事な構成力に驚かされた。創立50周年の東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団は、高関健常任指揮者とともに、ヴェルディの歌劇「ドン・カルロ」（演奏会形式、9月）、メシアン「トゥーランガリラ交響曲」（11月）と大作に挑み、存在感を示した。

神奈川フィルハーモニー管弦楽団は、沼尻竜典音楽監督が4年目に入った。楽員たちと結束を固め、定期はもとより、

斬新な組み合わせで企画力の高い音楽堂シリーズや、音楽監督が得意とするオペラへの取り組みとなる6月のワーグナーの楽劇「ラインの黄金」(演奏会形式)も注目された。群馬交響楽団は、創立80周年を迎え、飯森範親常任指揮者とマーラーの交響曲第8番「千人の交響曲」で祝った(11月)。毎回の定期に邦人作品を入れるなど、地方から熱い発信を続けた。

各地のオーケストラについては簡単に触れておきたい。札幌交響楽団は、エリアス・グランディが首席指揮者に就任し、「マーラー・プロジェクト」と「リヒャルト・コレクション」を始動させた。山形交響楽団は、常任指揮者の阪哲朗と手堅い活動を続け、恒例の東京・大阪公演(6月)、3年目の演奏会形式オペラシリーズ(2月)も定着してきた。仙台フィルハーモニー管弦楽団は、常任指揮者高関健・指揮者太田弦体制3年目。生誕100周年の芥川也寸志の未出版作品、弦楽のための「陰画」やバルトークのヴァイオリン協奏曲第2番(ヴァイオリン、金川真弓)など高関のこだわりと的確な指揮が聴衆を惹きつけた(9月)。

愛知県を拠点とする名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団、愛知室内オーケストラの4つのオーケストラが、「愛知4大オーケストラ」としてタッグを組み、互いに刺激的な活動を続けた。京都市交響楽団は、沖澤のどか常任指揮者の個性際立つプログラミングで新時代を切り開く。6月のジョルジュ・レンツ「ヴァイオリン協奏曲」(日本初演)とフランス近現代の組み合わせも斬新、9月の東京公演では女性作曲家ファランクの交響曲第3番を取り上げるなど彼女のリーダーシップのもと颯爽とした音楽を繰り広げた。

大阪関西万博で沸騰した大阪では、4つのオーケストラ―大阪交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、日本センチュリー交響楽団―が「大阪4オケ2025」(5月)で連携するとともに、各団体の音楽監督、常任・首席指揮者が強い個性を示した。広島交響楽団は、音楽監督クリスティアン・アルミンクと被爆80周年の特別な年を迎えた。九州交響楽団は、首席指揮者・太田弦の2年目のシーズン。毎夏恒例の「フェスタサマーミュージックKAWASAKI」に初参加し、ショスタコーヴィチの交響曲第5番などフレッシュな演奏を聴かせた(8月)。

最後に、昨年も多くの楽団で指揮が予定されていた秋山和慶が1月に急逝した。秋山の日本のオーケストラ界の発展への多大な貢献は、決して忘れてはならない。また、広上淳一が令和6年度(第75回)芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)を受賞した(3月)。アーティスティック・リーダーを務めるオーケストラ・アンサンブル金沢とともに能登半島地震の被災者の日常に音楽を届ける活動は、共生社会における芸術文化活動の展開に示唆を与えるものと評価された。

柴辻純子(しばつじ・じゅんこ)【音楽学・音楽評論】

東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学研究科および慶義塾大学大学院修士課程修了(音楽学専攻)。主な研究領域は新ウィーン楽派を中心とする20世紀音楽、および同時代の音楽。

大学での講義のほか、新聞、音楽専門誌、各種音楽媒体への寄稿を続け、文部科学省文化審議会委員などを務める。また、1990年代からNHK-FM番組で解説、司会を担当。現在は、「ブラボー!オーケストラ」のレギュラー・パーソナリティーとして出演中。